

## ほうさ 第35号

1988年7月 名古屋市蓬左文庫 Nagoyashi Hôsabunko

# 展示图』り

一 市制百周年・東区区制八十周年記念 —

### 江戸時代の名古屋を考える

 $(3)10.22 \pm \sim 12.4 \oplus$ 

かって 那古野村と呼ばれた名古屋台地の北端に築城と城下町の建設がはじまったのは、慶長14年(1609) のことである。 以来、260年、名古屋は、江戸と大坂の中間に位置する御三家筆頭尾張徳川家の城下町として独自の地位を確保し、発展することとなる。 それは、時々の諸状況によって紆余曲折を経るものの、すべてが、東京へ東京へと中央集権化を強めていく明治以降に比べ、名古屋がもっともその個性を発揮し、独自の文化を育て繁栄した時期であった。

一方、築城後まもなく、城内につくられた当文庫の前身尾張藩の御文庫も、名古屋の繁栄とともに歩

み、文化発展の水先案内人の役割を果した。維新後は、旧尾張藩および尾張徳川 家の旧蔵書を中心として、公開文庫の先 駆となって現在におよび、誕生から380 年、当文庫には、名古屋の歴史と文化を 物語る書物が所蔵されている。

今年は、当文庫とは歴史的つながりをもつ東区が区制八十周年を迎えるとともに、来年は名古屋市の市制百周年にあたる。今回は、これを記念し、当文庫の蔵書に、名古屋市博物館、同鶴舞中央図書館の蔵書も加えて、江戸時代の名古屋の諸相を3回に分けて紹介するものである。(参考文献)

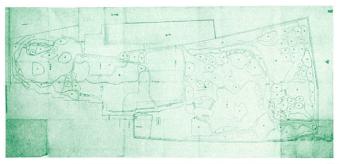
「日本名城集成 名古屋城」(昭和60年 小学館)

「名古屋市史 学芸編」「同 人物編」

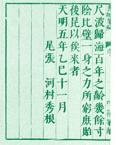
(大正4年、昭和9年 名古屋市) 「松平君山考」〔文化財叢書第73号〕

「河村秀根」

(市橋鐸 昭和52年 名古屋市) (阿部秋生 昭和17年 三省堂)







「尾州名古屋御城下之図」(左上) 「御下屋敷惣図面」(左下) 「書紀集解」(右下)

### Ⅰ. 熱田の宮と名古屋城

熱田神宮は、日本武尊が宮簀媛に与えた草薙剣を祀ったという創建伝説にはじまり、すでに「日本書紀」にその名の登場する古代以来の古い歴史をもつ神社である。周辺には古くから門前町が形成され、さらに、東海道の宿場町の一つであるとともに、南側に海をひかえる港町でもあった。熱田が都市としての形態を整えるのは、戦国時代の末ごろといわれる。江戸時代の熱田は、元和2年(1616)、東海道五十三次中唯一の海上航路である桑名までの七里の渡が開設されるなど、宿場町として繁栄するとともに、新興城下町名古屋の発展により、その外港として一体化を強めていったのである。

また、神宮を中心に年間約70をこえる神事祭礼が行なわれ、東西の文化人達が宿場を通るなど、古い歴史を背景として、新興都市名古屋とは異なる文化圏が形成されており、これによって熱田は、物質面だけでなく、文化的にも名古屋の外港の役割を果していた。

熱田から美濃路を北へ、碁盤の目に整然と町割された名古屋城下がひろがり、その北端に金鯱の輝く白亜の天守がそびえる。徳川家康が、西国筋の前衛として5年以上の歳月をかけた名古屋の築城と城下町建設は、当時の最先端の技術を駆使し、幕府の権力によって諸大名の力を結集した国家的大事業であった。以後、江戸時代を通じて様々な修理、増改築が行われるが、その意匠、技術は、その時々の最新のものがとり入れられてきた。

装飾性を重視した華麗な天守閣。将軍の宿舎として狩野探幽の筆による襖絵をはじめ、豪壮な意匠を持つ本丸御殿、「御城」と呼ばれ、尾張藩の正庁であった二の丸(他藩で「御城」=正庁は本丸をさす)、ここには、創建時、初代藩主義直の好みにより、先進的な唐様の庭園が作られ、数寄屋は後世にその名を知られた「猿面茶屋」であった。北側に堀をへだてて広がるかつての沼地下御深井には、初期には、直径 700mにもおよぶ蓮池や山など自然の風景を写した庭園がつくられ、江戸時代も後期には、庭内に門前町、宿場町を再現するという当時としては前衛的な庭づくりが行われた。

当文庫の名称でもある <sup>\*</sup> 蓬左、は、江戸時代に使われた名古屋の別称である。古い歴史を持つ蓬莱島=熱田宮(熱田神宮には蓬莱伝説があるためこう呼ばれた。)の左方=北(東海道を京都から下ると左側)に開けた町という意味で、二つの町の歴史的な関係を示す言葉である。熱田宮と名古屋城に象徴される江戸時代名古屋の繁栄は、古い歴史と文化の上に築かれた新しい町の持つ力によるところが大きいのではないだろうか。

大き	いのではないだろうか。	
1.	<b>星張国図</b>	1枚
2.	尾張国図 江戸中期写   名古屋村古図 写   尾張絵図 写(江戸)	1枚
3.	尾張絵図 写(江戸)	1枚
4.	尾張志附凶 愛知郡西・熱田	
	小田切春江画 天保15年写	2枚
5.	尾州名古屋御城下之図 江戸中期写	1 車由
6.	熱田本宮末社絵図 写(江戸)	
7.	熱田宮惣絵図 同 熱田七社新絵図 同	1枚
8.	熱田七社新絵図 同 名古屋城普請丁場割之図 同	1枚
9.	名古屋城晋請丁場割之凶 同	1枚
10.	尾州名古屋城図 享保 2 年 尾陽名古屋城図 同	写 1折
11.	尾陽名古屋城図 同	1 折
12.	中御座之間北御庭惣絵	1 110
13.	江戸初期写(複製) 御城二之丸御庭之図 写(江戸)	1 权
14.	二之丸御庭道及踏石図 同	1 枚
	元之光阿廷追及超石区 同 花壇之図 同	1枚 1枚
16	花壇之図 同 桜御間南御庭四季之図 同	1枚
17	尾張名所図会 前篇	1 1
	岡田啓·野口道直等編 森高雅·小田切看	秦江等面
		7巻7冊
18.	小治田真清水 岡田啓 昭和5至8年刊	
	張州雑志	
	内藤正参(東甫) 江戸中期写 100	巻100冊
20.	尾張名陽図会	
	高力種信 昭和15年刊	
	(天保年間写、自筆稿本複製)	7 冊
21.	那古野府城志 樋口好古 江戸末期写	2 冊
22.	東海道中膝栗毛	
	十返舎一九 江戸末期刊	8編18冊
23.	諸国道中金の草鞋	

	同 文化・文政年間刊	24冊
24.	名護屋見物四編之綴足	
	東花元成 文化12年刊 2 老	生2冊
25.		生2冊
26.	熱田祭奠年中行事図会 江戸末期写	10冊
27.	尾張年中行事絵鈔(複製)	
	高力種信・小田切春江編画	
	文政~天保年間写(小田切春江筆)	
	(原本 東洋文庫蔵)	14冊
28.	指南車 石橋真酔 写(享和3年序・稿本)	1冊
29.	駅客娼穿 模釈舎 写(文化元年序)	2冊
30.	浮雀遊戲島	
	梧鳳舎潤嶺 写(文化3年序·稿本)	1 冊
31.	蓬左遷府記稿	
	加藤品房 江戸末期写	1 冊
32.	金城温古録	
	奥村得義 同 65巻・付1巻	生66册
33.	御天守御修覆留(宝暦) 写	1 冊



「熱田祭奠年中行事図会」

### Ⅱ. 藩主と家臣の住んだ町 ~江戸時代の東区~

現在、名古屋市東区に属する地域は、江戸時代には名古屋城下の東部、山口と呼ばれた地域と、城下を出て東へ旧春日井郡大曽根、矢田、大幸の矢田川南岸の村々から成立している。

名古屋城下の東部は、城下の中心碁盤割と呼ばれた町人地に対し、その多くを藩士の住居が占める 武家地であり、その中に寺院や藩主、有力家臣の別邸が点在し、ところどころ寺院の門前や、主要道 路の両側を町家が占めるという様相を呈していた。

広い境内を持つ藩主の菩提寺建中寺を境に山口の西部、現在の白壁、泉周辺は、一戸平均300~700 坪に整然と屋敷割がなされた上中級藩士の家敷が立ち並び、この中には、「鸚鵡籠中記」の作者として知られた朝日文左衛門の屋敷もあった。一方、建中寺の南側から東にかけて現在の百人町、黒門町、筒井周辺は、百人組、黒門組などに属した下級藩士の組屋敷が集中し、100坪以下の住居が軒を並べていた。

江戸時代の城下の絵図を見ると、大きく区画をとった空白地帯は、藩主や有力家臣の別邸か寺院である。ちょうど、上中級家臣と下級家臣の居住地区の境にあたる現在の代官町から葵にいたる6万4千坪の広大な敷地を占めたのは、藩主の別邸、御下屋敷であった。内部には、豪壮な邸宅と京都の名所や東海道を模した庭、さらに薬園、観音堂、稲荷堂などもあり、公務を離れた藩主等の休息の場となった。また、四代吉通の母本寿院が江戸での乱行の末、ここへ送られて晩年をすごし、将軍吉宗の勘気にふれて蟄居させられた七代藩主宗春も、ここで余生を送っている。

建中寺の北方、現在、当文庫や徳川美術館のある葵公園を中心とした地域は、城下と大曽根村の境にあたり、江戸初期には、成瀬、石河、渡辺等、大名格の家臣の別邸が置かれていた。このあたりの景観を好んだ二代藩主光友は、元禄 8年(1695)、三家合せて13万坪にもおよぶ広大な敷地を隠居所とした。光友は、城内の御文庫からここへ書物を運ばせており、その目録も残されている。光友の死後は、ふたたび三家の別邸となったが、明治維新とともに徳川家のものとなり、城内にあった書物や道具類の多くが、この屋敷内に運びこまれた。

城下に境を接する大曽根村は、城下への入口に木戸が設けられ、名古屋四口の一つ大曽根口と呼ばれた。村内を善光寺街道と瀬戸街道が通過する交通の要衝として賑うとともに、城下の発展に従って、西側には町屋が増加し、町奉行所の支配下となって城下と一体化していった。しかし、大曽根村も町場をすぎると、街道沿いに点々と集落が形成され背後に田畑が広がる農村地帯となる。矢田、大幸の二村にいたっても同様で、維新までその景観を大きく変えることはなかったのである。

二村	にいたっても同様で、維新までその景	観を大き	く変え	ることはなかったのである。	
1.	尾府名古屋図  江戸中期写	1 車由	22.	那古野府城志	
2.	名古屋城下明細図 写(江戸)	1 冊			##
3.	名古屋城下図 同	1 冊	23.	尾張徇行記	
4.	名古屋図 明治2年写	1 冊		同 同 1	₩
5.	名古屋図 写(江戸)	7枚	24.	尾張年中行事絵鈔(複製)	
6.	名古屋割絵図 写	13折		高力種信・小田切春江編画	
7.	建中寺御霊屋并御内仏御参詣之図			文政~天保年間写(小田切春江筆)	
	写(江戸)(名古屋鶴舞中央図書館蔵)	1枚		(原本 東洋文庫蔵) 14	##
8.	建中寺松本池堀割図 写	2枚	25.	猿猴庵合集	
9.	建中寺御構外町屋割図 写	1枚		高力種信 江戸後期写(自筆)	
10.	御下屋敷御指図 写	1枚			1111
11.	御下屋敷惣図面 写	1枚	26.	名陽見聞図会 四編上	
12.	宝曆元年御下屋敷御殿與表絵図 写	1枚		同 天保7年写(自筆)	
13.	大曽根下屋敷図 写(江戸)	1枚			##
14.	名古屋赤塚町之図		27.		##
	江戸後期写(個人蔵	) 3 枚	28.		##
15.	大幸村絵図 写(江戸)	1枚	29.	渡辺家御預百人組之留記 明治末期写	
16.	大幸村絵図(尾張国町村絵図)				##
	昭和63年刊(江戸後期写本複製)		30.	御下屋敷旧記 同 (同) 1	##}
	(名古屋鶴舞中央図書館蔵)	1枚	31.		
	矢田村絵図(同) 同(同) (同)	1枚		奥村得義 江戸末期写 65巻・付1巻66	
18.		1枚	32.	続岩淵 江戸中期写 3巻1	
19.	尾張名所図会		33.	昔咄 近松茂矩 元文3年写(自筆) 7巻7	##
	岡田啓·野口道直等編 森高雅·小田切春江		34.	瑞龍院様御隠居以後従表御取寄御逝去後	Ź
		多7冊		迎涼閣御文庫江入御書籍 写(江戸) 1	1111
20.	小治田真清水		35.	. 0123207412	
	岡田啓 昭和5至8年刊 8巻	6 冊			#
21.	尾張名陽図会		36.	藩士名寄 写 (稿本) 140	
	高力種信		37.		冊
	昭和15年刊(天保年間写、自筆稿本複製)	7 冊	38.	仮名分名寄(文政至元治) 写 3	冊

### Ⅲ.書物愛好の風土 ~名古屋学の先駆者たち~

「名古屋学」という言葉は、ずいぶん以前から使われて久しいが、まだこれについての学術的研究や定義はない。ここでは、名古屋を中心とした学問研究及び文化活動全体を指すものとして使用させていただきたい。当文庫の前身、尾張藩の御文庫を創設した義直を始めとして、江戸時代の名古屋の学者、文化人たちは、書物好きな蔵書家が多く、藩に献納されたものなどを始め、当文庫に伝えられたものも多い。今回は、江戸時代の名古屋を中心に個性的な活動を行った学者、文化人をとりあげ、彼等の著書や蔵書によって「名古屋学」の一端をご紹介する。

名古屋における学問研究の出発点に位置するのは、初代藩主義直(1600~50)とその側近の学者たちである。徳川家康の第9子に生まれ、駿府へ隠居した家康のもとで当代一流の学者たちに囲まれて少年時代を送った義直は、その側近にも優れた学者を集め、かれらの協力のもとに尾張藩の文教政策を推進した。義直には中国の文人趣味を志向する傾向があり、収集した書物の大半が、漢籍(中国、朝鮮の書物)であったが、彼の学問的興味が日本の古代史研究と神社研究にあったことは、「続日本紀」はじめ古代史関係の文献の収集に力を入れ、彼が側近の学者たちとともに「類聚日本紀」(神代より光孝天皇まで歴代の事跡を六国史をもとに編纂したもの)、「神祇宝典」(全国の主要神社を国郡別に分け、所在、祭神、由緒などを明らかにしたもの)を編纂したことによっても明らかである。

義直の書物収集や著述活動を実際に推進したのは、堀杏庵 (1585~1642)と彼の門弟たちであった。林羅山 (1583~1657)らとともに藤原惺窩門下の四天王の一人に数えられた杏庵は、はじめ広島の浅野家に仕えたが、義直の招きにより、尾張藩に仕えた。杏庵の指導の下に、神社の調査や古記録の書写などに携わったのは、貞高、道隣ら彼の息子たちや、深田正室、武野安斎、並河魯山等であった。

義直の指導した編纂事業によって始まった学術研究の気運を受け継ぎ、発展させたのは、天野信景(1661~17 33)と吉見幸和(1673~1761)であった。数百巻とも千巻とも言われる随筆「塩尻」を残した天野信景は、国学者を称するものの、その守備範囲は広く、まさに博覧強記、尾張東照宮の神官吉見幸和は、生来の才に京都遊学を経て、当代随一の神道家と評された人物である。ともに三代藩主綱誠の命による「尾張風土記」の編纂に携わった二人に共通するのは、優れた資料に裏づけられた考証に重点を置く態度であり、近世の実証主義的学問研究の先駆をなすものであった。また、幸和は、生涯書物を写す手を休めることはなかったと言われる程、資料の収集に力を入れ、その膨大ですぐれた蔵書に対して、藩主宗勝は、吉見家の邸内に書庫を建て(吉見文庫)、御文庫に準じた扱いをした。

この後、まもなく名古屋の学術文化の中心に登場したのが松平君山 (1697~1783) である。母方の曽祖父に堀杏庵を持つ君山は、漢学に始まって本草学に至るまで、及ばぬ学はないに等しく、「博識と注釈、ゆえに世事にうとし」とさえ評された君山学派を形成した。書物奉行の職を35年間勤めた君山は、綱誠の死去によって中断した「尾張風土記」の編纂の遺志を継ぎ、初めての官撰地誌「張州府志」を編纂、さらに曽祖父堀杏庵が手掛け未完に終った藩士の系譜編纂事業を引き継いで、「士林泝洄」を完成させた。君山の蔵書は死後、子孫の手によって藩の御文庫に献土され、そのまま現在、当文庫に伝えられている。

このような名古屋における学術文化の隆盛の中で、名古屋学を代表する河村秀穎(1718~1783)、秀根(1723~1792)、益根(1756~1819)による紀典学が成立する。兄秀穎と共に吉見幸和に神道を学び、その合理的実証的解釈のための古典研究をめざした秀根は、「日本書紀」の校訂と解釈に取り組み、次男益根の協力を得て、「書紀集解」を完成、刊行した。中世の神道家による神秘主義的な解釈に対して、近世の合理精神にもとづいた研究態度は、日本書紀研究および古代史研究上画期的なものであった。こうした業績の背景には、君山のあとをうけて書物奉行を勤め、蔵書数万巻といわれた秀穎の文庫「文会書庫」の存在があった。この河村家の蔵書のほとんどが戦前、市立名古屋図書館に所蔵されていたが戦災で焼失、焼け残った一部が名古屋市鶴舞中央図書館に所蔵されている。

また、この時期には、有職故実、律令研究においても実証的な古典研究が盛んとなり、神村正隣(1728~1772) 忠貞(1740~1781)、稲葉通邦(1744~1801)等が、秀根、秀穎等とともに研究会を行った。神村家は蔵書家としても知られ、その中には優れた古典籍が数多く含まれていたが、後嗣が絶えたため、その蔵書は藩の御文庫に納められ、現在は当文庫に伝わっている。神村正隣の門人稲葉通邦には、秀根等と共に行った義直の著書「神祇宝典」「類聚日本紀」の校訂、眞福寺本「古事記」の校訂などの業績がある。通邦は後に宣長の鈴の屋門に入ったが、伊勢に本居宣長が出ると、名古屋においてはその地理的関係もあり、影響は大きく、この後の古典研究は宣長門

下の植松茂岳(1794~1876)、有園 (1829~1882)、山田 壬疇 (1812~1876) 等によって引き継がれた。

こうして、名古屋における学術研究は、初代藩主義 直以来、古代史を中心とした古典研究を一つの特徴と してあげることができる。一方では、名古屋の学問は 博覧強記を尊重し、 ゆえに天野信景の 「塩尻」 に代 表される雑纂記録――自らの見聞、人からの伝聞、書物 の抄出、学問上のメモ、通信の控など様々な記録を含 んでいる――が「名古屋学」の著作の特徴の一つである とも言われる。また、天野信景、吉見幸和は、「鸚鵡



諸家雑談〔葎の滴〕 (細野忠陳)

籠中記」の著者として知られる朝日重章 (1675~1718) 等とともに、学問研究と時事情報の交換の場として"文会" を作ったが、こうした文化人グループが名古屋ではいくつか生れている。とくに時代が下がるにつれ、時事的情 報交換の場としての傾向を強め、「張州府志」につぐ官撰地誌「尾張志」を編纂し、書物奉行をも勤めた深田正 韶(1773~1850)が主催した"天保会"、「葎の滴」の細野要斎(1811~78)、「王晁雑記」他の小寺玉晁(1800~18 78)、「松涛棹筆」の奥村得義 (1793~1862)「青窓紀聞」の水野正信 (1805~69)など、いずれも膨大な雑纂を残した 人物たちが、記録交換の場とした"同好会"などがあった。こうした風潮は名古屋だけに見られる現象ではなく、 江戸時代の文化人が一様に多かれ少なかれ持ったものであった。これが単なる雑纂記録の集積で終るならば、近 世地方文人趣味の一こまに終始するのだが、膨大な記録を背景として、個性的な著作が生れている点に注目せね ばなるまい。当時の尾張の自然、風俗、文化財などを自筆の絵と文章で描いた尾張の地誌、博物誌「張州雑志」 100巻100冊の著者内藤東甫、その影響下に、当時の風俗を絵本に仕たてた高力種信(1756~1831)と、それにつ らなる小田切春江 (1810~1888)、小寺王晁、さらに岡田啓、野口道直の「尾張名所図会」もこの延長線上に位 置づけられる。また、30年以上もの年月をかけて、膨大な資料収集のもとに完成した奥村得義による「金城温古 録」は、現在にいたるまで名古屋城研究の名著として評価されており、まとまった著作は残さなかったものの、 水野正信が写し集めた「資治雑笈」「青牖叢書」は、近世の外交、蝦夷を考える上で欠くことのできない資料群と なっている。

今一つ、名古屋学が誇るものに「尾張本草学」がある。シーボルトからも高い評価を受けた水谷豊文を頂点と して、全国の学会をリードし、その門下からは多くの俊英が出ている。とくに、長崎でシーボルトの教えを受け た伊藤圭介は、後に西洋砲術家上田仲敏とともに尾張洋学館を設立、同館の蔵書は当文庫に伝えられている。圭 介は、維新後明治政府に出仕、東京大学理学部教授などを経て、我国植物学の父と称せられた。

現代の名古屋は文化不毛の地と言われて久しいが、それは、大阪や東京に比べ、その気風ゆえに華やかさに欠 けるだけかもしれない。ともあれ、江戸時代の名古屋には、多くの個性的な「名古屋学」の先駆者たちが存在し たことはたしかである。

#### 徳川義直

- 御書籍目録(元和・寛永) 江戸初期写 2 # 1.
- 御文庫御書籍目録 写(寛政年間) 12删
- 3. 神祇宝典 徳川義直 正保3年写(原本) 9 巻·附図 1 巻10冊
- 同 江戸初期写(堀杏庵筆) 18巻18冊 4.
- 類聚日本紀 同 稲葉通邦校

寛政年間写 (稲葉通邦筆)

170巻系図4巻70冊

神道正宗(中臣祓抄) 同 6. 江戸初期写 1 #

続日本紀 卷一至一〇

> 菅野真道等編 慶長17年写 徳川家康・義直蔵書 10巻

8. 同 江戸初期写

角倉平次·徳川義直蔵書 40巻13冊

#### 堀正意 (杏庵)

- 寛永御即位記略 堀正意 寛永年間写(自筆) 1冊図2枚
- 杏陰集 陽明文庫本 同 昭和21年写

21巻 3 冊

#### 天野信景

- 11. 塩尻 天野信景 江戸末期写 129巻67冊
- 尾州古城志 長坂政賢 天野信景補校

天保6年写

1 册

5 册

1 ##

#### 朝日重村・重章

- 鸚鵡籠中記抜粋 朝日重章 明治末期写
- 名古屋市鶴舞中央図書館蔵 14. 塵点録 朝日重村・重章

23冊

#### 吉見幸和

- 吉見家書目録 吉見幸和 写 9巻9冊
  - 尾張祠考 巻上 百 延享5年写(自筆)
- 17. 神代正義

延享3年写(吉見幸混筆) 3巻5冊

18. 吉見左京大夫吉見大膳大夫書状 1 #

#### 河村秀穎・秀根・益根

書紀集解 河村秀根著 河村殷根・益根訂 30巻20冊 江戸末期刊

20. 六国史集解 高力種信 (猿猴庵) 江戸中期刊·写(稿本、河村秀根·益根等筆) 52. 開帳談話 高力種信 写(自筆) 1 ## (名古屋市鶴舞中央図書館蔵) 116∰ 深田正韶 日本文徳天皇実録 藤原基経等編 元禄13年刊 河村秀穎·秀根校合本(加藤粛、 53. 尾張志 深田正韶等編 天保15年写 野口道直旧蔵) 10巻 2 冊 60巻目 1 巻61冊·附図14枚 河村秀穎 大正2年写 22. 楽寿筆叢 54. 天保会記 深田正韶 江戸末期写(稿本) 16冊 (名古屋市鶴舞中央図書館蔵)5冊 細野忠陳 (要斎) 23. 御文庫御蔵書目録 同 写(江戸) 5 ∰ 24. 天明老々記 写 (江戸) 百 1 ## 55. 諸家雑談[葎の滴] 細野忠陳 江戸末期写(自筆) 6冊 神村正隣・忠貞 岡田啓 (文園) 25. 関市令考 神村正隣 56. 尾張名所図会 前編 明和6年刊(自筆補訂書入本) 1冊 岡田啓·野口道直等編 森高雅·小田切春汀等画 26. **令集解** 神村正隣・稲葉通邦等校 天保15年刊 7巻7冊 江戸中期写 神村氏旧蔵 11冊 一葉書庫記 岡田直 写(自筆稿本) 令御抄 第六至二二 一條兼良 江戸中期写 27. (名古屋市鶴舞中央図書館蔵) 1冊 神村氏旧蔵 2 册 水野正信 28. 日本書紀 舎人親王等編 寛文9年刊 神村忠貞校合本 30巻15冊 58. 資治雑笈 水野正信編 江戸末期写・刊(自筆) 菅野真道等編 明暦年間刊 29. 続日本紀 6輯94冊 神村忠貞校合本 40巻20冊 59. 青牖叢書 江戸末期写(同) 百 12巻103冊 日本文徳天皇実録 藤原基経等編 元禄13年刊 30. 60. 青窓紀聞 百 同(同) 204冊 神村忠貞校合本 10巻 4 冊 小寺広路 (玉晁) 日本三代実録 藤原時平等編 寛文年間刊 31. 神村忠貞校合本 50巻20冊 61. 続学舎叢書 小寺玉晁 江戸末期写(自筆) 26巻22冊 女房装束図 明和8年写(神村忠貞筆) 1冊 奥村得義 大和物語 江戸初期写 33. 62. 金城温古録 奥村得義 神村正隣旧蔵 1 ## 百 65巻·付1巻66冊 63. 明倫堂始原〔国秘録〕 同(奥村得義筆) 1冊 34. ちくさ 江戸初期写 神村氏旧蔵 1冊 安井重遠 稲葉诵邦 64. 鶏肋集 安井重遠編 江戸末期写·刊 23 1111 65. 夏南破南志 同 写(自筆、嘉永6年序) 43∰ 35. 古事記 真福寺本 太安万侶編 寬政年間写(稲葉通邦筆) 3巻3冊 植松茂岳・有園 続日本紀 菅野真道等編 立野春節校 66. 大須真福寺経蔵目録 写(御記録所旧蔵)1冊 明曆年間刊(補刻有) 附·出版願書、版権免許状 67. 校正古事記 稲葉通邦等校合本 40巻20冊 植松茂岳校 明治8年刊(尾張徳川家) 松平君山 3巻3冊附2通 68. 類聚三代格 藤原冬嗣等編 植松茂岳等校 吏隠亭蔵書目録 1 # 弘化2年刊 6巻12冊 御側御書物目録 君山本 江戸末期写 1冊 69. 続日本紀 菅野真道等編 立野春節校 刊(明曆版覆刻) 松平君山 写 39. 韓人唱和詩集 2 册 慶応3年植松有園等校合本 40巻20冊 弊帚集 40. 同 江戸中期写(自筆)71巻39冊 山田千疇 張州府志 同、千村伯済 41. 70. 椋園叢書 山田千疇 江戸末期写(自筆) 江戸中期写 30巻図 1巻26冊 安永5年刊 42. 本草正為 百 23巻24冊 71. 古事記 巻上·下 写(山田千疇筆)付訓点 岡田啓手識 12巻6冊 4 删 新鐫花鳥譜 明·黄鳳池編 72. 記序略解 山田千疇 慶応4年写(稿本) 1冊( 43. 73. 日本書紀 江戸中期写(松平君山筆) 1巻1冊 舎人親王等編 江戸初期刊 新鐫草木花詩譜 尾張藩内庫·山田千疇旧蔵 30巻15冊 44. [ii] 菅野真道等編 同(付訓点) 74. 続日本紀 ([百]) 1巻1冊 将門記 真福寺本 28巻20冊 甞百社 写(元文元年松平君山奥書) 1 冊 75. 草木性譜 舎人重巨 刊(文政10年跃) 中村蕃政 (習斎)・政永 (得斎) (名古屋市鶴舞中央図書館蔵) 3巻3冊 46. 道学資講 中村政永編 江戸末期写 文政10年刊 有毒草木図説 同 400巻367冊 (同) 3巻2冊 47. 文会筆録 山崎嘉編 天和3年刊 77. 本草会物品目録 甞百社編 天保6年刊 1 冊 中村氏蔵書 20巻 7 冊 伊藤圭介 尾崎良知 78. 泰西本草名疏 伊藤圭介訳 文政12年刊 百 48. 同 2巻・付2巻3冊 蟹養斎·尾崎良知蔵書 20巻13冊 79. 万宝叢書硝石篇 伊藤圭介訳 上田仲敏校 嘉永7年刊 3巻・付1巻4冊 石川安貞(香山)・嘉貞(魯庵) 上田仲敏 資治通鑑証補 80. Proeve eener Japansche Spraakkunst; Toegelicht. 宋·司馬光撰 胡三桂音註 石川安貞証補 Donker Curtius, J.H., verb. door Hoffmann 江戸末期写(石川嘉貞筆) 294巻294冊 内藤東甫 Leyden. 1857 尾張洋学館旧蔵 1 v. 81. Reglemet op de Exercitien en Manoeuvres 内藤東甫 江戸中期写 100巻100冊 50. 張州雜志

1 ##

51. 張城尚歯会

天明元年刊

der Infanterie.

Breda. 1855;

Ansei 4 (1857)

nagedrukt te Nagasaki,

同

3 v.

### REPARENCE 達在アルバム XELENCES

### 4. 仕事あれこれ

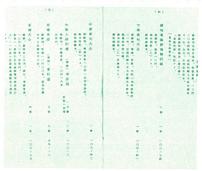
私の文庫での初仕事となった『駿府御分物御道具帳』のカード化が済んだ頃、先輩の福井保氏が満州の桂林図書館に卦任されました。ちょうどその頃、文庫所蔵の朝鮮本の目録を福井氏が手がけられていましたので、私がそれを引き継いで、完成させることになりました。書誌学上かなり専門的な仕事でしたので、多少苦心はしましたが、専門的な骨組みは福井氏が既に作られていましたし、また、いろいろな古書が方々にあるので、書誌的な事柄は割合早く憶えられました。これは、タイプライターで打ち、私のへたな字で題簽を書いて三~四冊作りました。一冊は福井氏に進呈し、残りは文庫にありましたが、後に一冊、神戸大学図書館にその方面の研究者の方がいらっしゃるのでぜひ、とおしゃるので、寄贈しました。

また、閲覧者や学生に説明したりするようになり、初めは、おっかなびっくりだったのですが、段々慣れていきました。なんといっても、しょっちゅう古書を扱っているというのが強味でした。

当時の閲覧者の数はまちまちで、全然来ない日もあり、学生が何人か来るという日もあり、なかなか平均するのが難しいのですが、平均すると三人くらいでしょうか、今よりは少なかったです。閲覧者は、学者やその紹介状を持って来る学生がほとんどで、特に制限はしていないのですが、名前も知られておらず、今とちがって入りにくいので、冷やかしと称する人はほとんどいませんでした。

そのほか、図書の筆耕といった仕事もありました。これは、尾張藩史料の蒐集ということで、名古屋図書館( 現鶴舞中央図書館)から本を借り出してこちらで写したり、あるいは向うで写してもらったりということを、継 続的に行っていたのです。当時はわりに自由だったんです。所先生から、これはアルバイトでやってくれ、と言 われましたので、勤務時間内ではなく、自宅に持ち帰って筆耕したこともあります。以前から継続的に筆耕をし ている人は達筆で、私の頃にはもう相当できていました。林政史研究室のほうで、その老人に会ったことがあり ますが、昔かたぎの旧藩士の子孫の方で、大脇鐵三郎さんとかおっしゃいました。その他にも何人かで写してみ えたようです。これは唐草模様の地紋の入った緑色の表紙に和装製本されており、請求番号の二十五~三十番く らいの間に入っています。

昭和15年頃から、名古屋市より、「名古屋叢書」刊行の気運がもちあがり16年から編纂事業に着手したのですが、編集には当時の各方面の錚々たるメンバーが集まっていました。昭和24年3月までの編集の経緯や、編纂委員の変遷については市橋鐸先生が書かれた「響素名古屋叢書總目録」(昭和24年名古屋市教育委員会刊)に詳しく書かれています。私自身、戦後、この事業に深く関わるようになるのですが、当時は名古屋市とは何の関係もなかったのであまり知らないのです。しかし、黎明会からも、顧問として義親先生が、また参与として所先生が参加しており、文庫も全面的に協力することになりましたので、尾崎久弥先生や市橋先生他数名が、文庫の見学がてら資料の選定に泊まりがけでみえました。尾崎先生もまだ50才くらいで、髪も黒々としていらっしゃいました。その後の筆耕は、東京で写したと言うよりは、名古屋へ持って来て、徳川美術館の事務室あたりで写したんじゃないかと思います。写真にとったり、原稿用紙にペンで筆写したりしたようです。当時の編集委員の人たちは、まあ新米と見たんでしょう、あまり声もかけてくださらなかったのですが、文庫の貴重図書展の解説を全部



[このシリーズは昭和61年秋の談話を基に編集したものです。]

注1) 「蓬左文庫朝鮮本目録」 (昭和13年12月刊) [写真左]

注1) 「**達左**又庫朝鮮本日録」 (昭和13年12月刊) 「写真左」 注2) 前述「監書名古屋叢書總日録」によれば、昭和16年5月7日より三日間、編纂 委員、参与、主任等が、蓬左文前に於て郷土資料の調査を行った。 注3) 山田秋衛氏が編纂委員に就任したのは昭和18年度。(同上書による)

★次回展示のお知らせ 「蓬左文庫の古文書」 昭和64年1月7日(土)~3月12日(日)

### 出版物一覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S. 50年刊) 3,500P	名古屋叢書三編第12巻(S. 56年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S. 51年刊) 4,000P	同 第 8 巻(S. 57年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同) 2,500円	同 第16巻( 同 )	3,000円
尾崎久弥コレクション目録第一~三集 各 1,500F	同 第19巻( 同 )	3,000円
名古屋叢書(正編)索引·総目録(S.53年刊) 2,000F	同 第17巻(S.58年刊)	3,000円
名古屋叢書続編 索引(S. 47年刊) 700F	同 第 <b>4</b> 卷(S.59年刊)	3,000円
名古屋叢書続編総目録(S. 44年刊) 400F	同 第9巻(S.60年刊)	3,000円
善本解題図録第一~三集(S.55年再版) 各 300F	同 第11巻( 同 )	3,000円
日本の古典〈蓬左文庫図録〉(S.52年刊) 200円	同 第18巻(1) (同)	3,000円
蓬左文庫·源氏物語図録(S.53年刊) 300F	同 第18巻(2) ( 同 )	3,000円
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1~No.15(S. 55~61年刊	, while (3. 01+19)	3,000円
各 1,800F	同 第14巻 (同)	3,000円
御本印型書鎮(S. 58年製) 1,000F	同 第10巻 回	3,000円
堀田文庫蔵書目録(S. 58年刊) 500F	同第2券	
蓬左文庫絵葉書〈8 枚組〉( 同 ) 300F		3,000円
蓬左文庫図録(同) 1,500F	月 第3巻	
蟹江慶次郎旧蔵書目録(S. 62年刊) 500F	9 一尾藩世記 下一(同)	3,000円
	同 第13巻	
	一天保会記鈔本一 ( 同 )	3,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

#### 

▷開館時間 午前9時30分~午後5時

▶休 館 日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)

祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館) 月曜 "月・火休館

年末年始(12月28日~1月4日)

▷閲 覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません

(閲覧料) 普通図書 無料

重要図書 有料(1部350円)

▶展 示 随時蔵書の一部を展示

(特別展を除き入場無料)

▶複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のない

ものについて複写サービスを行いま

す。その他、マイクロフィルムの利

用、写真撮影の申請を受け付けます

ので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

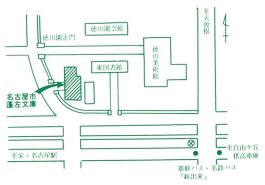
〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

**☎**(052)935−2173

/〈名古屋駅から〉 市バス<u>基2</u>「自由ヶ丘」「猪高車庫」行 名鉄バス「本地ヶ原方面」行

〈栄 か ら〉 市バス 基**2** 「引山」 「自由ヶ丘」 「猪高車庫」行

「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第35号 ☆昭和63年7月23日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)